

第40回研究論文集発刊に寄せて

審査委員長

菊池 龍三郎

1. 審査経過と結果

今年度の応募論文数は全部で120編（実際にはこの他に応募者が体調が極めて悪く締め切りに間に合わず規定上選考から除かざるを得なかった1編があります。）で、一昨年の125編に次ぐ2番目に多い応募数でした。今年度の特徴としては、地域別、教科別等でのバランスも取れ、また高等学校や社会教育分野からも応募があったこと、過疎化・少子高齢化をもたらす学校統廃合と義務教育学校設立など時代の変化に対応する動きに関わる実験的、試行的な研究も出始めたなど、応募した教育論文の内容的な範囲が広がったことは喜ばしいことと受け止めています。応募された先生方の意欲に対して心から敬意を表するとともに、本事業の意義について各方面に積極的にPRするなどして研究論文の作成・応募を働きかけてくださった関係者の方々にお礼を申し上げたいと思います。

応募論文120編について、私たち16名の審査委員に加えて、義務教育課、高校教育課、特別支援教育課の全面的なご協力を得て審査に当たりました。

第1次審査、第2次審査の結果、最優秀賞1編、優秀賞4編、優良賞16編、奨励賞3編としました。優良論文以上となった21編は内容的にも研究の進め方の面でも優れていて、相当の時間と精力を傾注した努力の結果であることが窺われたというのが審査に当たった委員一同の感想でした。

特に優秀賞以上となった論文5編は、研究のねらいも的確で、しっかりした研究計画のもとに研究がマネジメントされており、研究内容も研究方法も適切であり、どれも優秀論文に値するものであったと評価されました。

その中から最優秀論文は、那珂市立第一中学校の小沢浩先生の『即興力』を伸ばす指導の工夫―読むことを通して得た知識を、自らの体験や考えなどと結び付けて活用し、発信することが可能となるような言語活動の工夫―』とすることに決定しました。

本研究は、何よりも何を明らかにしたいのかが読み手によくわかる研究でした。文章も読みやすく、研究のねらいが焦点化され、それをひとつひとつの実践を通して検証していく過程もわかりやすく説得力のある論文でした。これは研究計画がしっかりできているからであると思われました。何をどう明らかにしていくかという研究の観点・視点が新鮮であることも評価できました。さらに今後応募される先生方に見習っていただきたいのは、文献研究がしっかりなされていることでした。研究テーマに直接間接に関係ある文献・論文に積極的に当たっていることがわかりました。

最優秀賞、優秀賞いずれも、研究が計画的追求的に進められており、実証の方法や態度にも厳しさが感じられ、優れた研究論文であると評価されます。ぜひ、多くの先生方に一読していただき参考にして欲しい論文ばかりです。

2. 研究論文を書き始めるに当たって

(1) いい論文を読んでみる

研究論文を書くためには、まず、いい論文と評価されている先行研究論文を読んでみることで、それを通して見習うべき点を“真似る”こと、これが一番の近道です。たとえば、この『教育論文集』に掲載されている最優秀論文、優秀論文に目を通してみてください。

研究のねらいは曖昧なままではいい研究論文は書けません。そこで、明確な研究のねらいとはどういうものを言うのか、どうすれば研究のねらいは明確になるのかという基本的なところから始めます。優れた先行研究論文を読むときには、まずそのところに着目して参考にするとよいと思います。

次は、研究のねらいをどのような段取りでどのような方法で明らかにするのかということについてです。優秀論文の執筆者がそのところをどうしているかについて、その論文の研究計画をしっかりと参考にしてください。いい論文とは読み手をなると説得させる力がある論文のことであり、それは計画がしっかり立てられ、それに従って研究が進められている論文のことでもあるからです。

(2) 最後まで仮説を意識し続けて研究を進めること

これまでもたびたび書いたり、話したりしていることですが、多くの論文を読んでみて感じるもののひとつが仮説の問題です。私だけでなく審査委員全体としても、研究論文では仮説が少し形だけになっているのではないかという印象を持っています。形だけの仮説ならこの言葉を使わなくてもいいのではないかとの意見もあります。

「AならばXであろう」という仮説の表現形式を形だけ真似てはいるが、実際には仮説にはなっていない場合が多いと思います。「Aでなくても（つまりBでも、あるいはCの場合でも）Xである」かもしれないのに、その論証をしないままに、「AならばXであろう」という形だけの仮説をつくって研究を始めているのではないだろうか。審査委員会は、そうした仮説の形にだけとられずに、「研究のねらい」程度の設定の仕方でもいいと思っています。もちろん仮説という用語を使ってもいいのですが、大事なのは、研究の最後まで仮説を意識しながら研究を進めて欲しいということです。最初に仮説を立てるけれども、いつのまにか仮説で掲げた研究のねらいを忘れてしまっている研究も少なくないと思うからです。最後まで仮説を意識しながら研究を展開しようとするだけでも、論文は必ず論文らしくなるはずです。

(3) 仮説の検証と授業実践の積み重ね

そのことと関連して、仮説の検証と授業実践の在り方について少し述べてみます。

教育研究論文である以上、研究のねらいとしての仮説が有効かどうか、正しいかどうかを検証する必要があります。実践発表であれば検証作業をしないでもよいかもしれませんが、研究論文ならば当然検証を必要とします。仮説の検証は、応募される先生方の研究テーマの多くが授業改善による児童生徒の理解力アップとか学力向上などを目指していることから、授業を用いて仮説を検証することが多いのは当然です。検証の方法は、たとえば、授業の指導法と学力向上の関係に関する仮説を検証する場合だと、指導法を新しい方法に変えた集団と変えない集団を対象に授業を行い、その結果を比較する。その際、当然、指導法以外の条件は理論上は同じにして（実際には大変難しいことですが）授業をやってみるようになります。その上で両グループの結果を比較する訳ですが、その差が統計的に意味のある差なのかどうかをチェックすることが求められてきます。

しかし、このような統計的な手法を用いることは実際には大変難しいのです。授業において児童生徒の理解を規定する要因は沢山あります。仮説で挙げた要因に着目して、それを変えたら結果が違ったから仮説が検証されたなどと簡単に言い切れるほど授業は単純なものではありません。加えて、授業を使っただけの仮説の検証はそうそう度々行うわけにはいきません。しかし、仮説という用語を用いる場合には、その検証には本来は上で述べたような厳密な作業を必要とするということを知って欲しいと思います。それだけに、授業の何をどのようにコントロールするのか、コントロールできるのか、十分に研究計画を練って欲しいと思います。

もうひとつ補足しておきます。教育研究では、一度だけの授業で期待した結果がすっきり出るようなものではありません。検証には実践の積み重ねが必要です。その意味でも、最近の応募論文には少し実践が足りないかなと思われるものがあることを付け加えておきたいと思います。研究論文が厚ければよいと言っているものではありません。自然科学の研究と異なって、必ずしも結果がすっきりと明白な形で出る訳ではなく、ある程度の継続した実践を積み重ねることで妥当かどうかということが言えるのだと思います。

それから、最近、仮説の検証の方法としてアンケート調査法を利用する研究が増えてきていると思います。これについてひとつ指摘しておきたいことがあります。

まず、アンケート調査は、いつ、どこで実施したのかわからかにしていない場合があります。客観性、信頼性の保証という面からも大事なことできちんと書いて欲しいと思います。また、ごく僅かな児童生徒を対象とするアンケートでパーセントの多い少ないで教師がやったことが正しいか正しくないかを判断することには慎重であるべきで、児童生徒の行動の変化を多面的多角的に読み取れる力量を身に付けて欲しいと思います。

(4) いつでも読み手を意識しながら書くこと

さらに大事なことがあると思います。それはいつでも、わかりやすく書くということです。誰にとってわかりやすければよいか。読み手にです。わかりやすい文章を書くためには、難しい言葉を使わずに平易な表現を心掛けることはもちろんですが、それだけでなく、この表現で果たして読み手に自分の意図が伝わるかどうかを常に意識して書くことが必要だと思います。簡単に言ってしまうと、ふだん自分が教えている中学生が読んでも彼らに理解してもらえるように書いたら、つまり、それほど読み手を意識して書いたら、それは優れた論文になるはずだということです。

これらのことを参考にして、是非、これからも日本教育公務員弘済会茨城支部が募集する研究論文に応募して下さることを心から期待しています。